第47回日本水環境学会年会優秀発表賞（クリタ賞）を受賞して

立命館大学大学院理工学研究科創造理工学専攻　佐　藤　浩　一

この度は第47回日本水環境学会年会にて，クリタ賞という栄誉ある賞をいただき，大変うれしく思います。まず，年会を運営していただいた方々，私に票を投じた学識者の方々，協力していただいた佐藤圭輔先生，國松孝男先生，市木先生および流域環境情報研究室の仲間たちに感謝します。年会では，「流域詳細調査に基づいた河川水中物質挙動の予測モデル構築に関する研究」という題目で発表しました。琵琶湖流域に位置する野洲川を対象として，各土地利用・流出機構別の物質挙動を解析し，降雨流出現象を捉えた簡易的なモデルを構築しました。結論として，モデルの計算値は実測の合計TOC負荷量を7割程度再現する結果となり，この理由としてモデル上で考慮していない河道内発生負荷量の存在や降雨規模によるL-Q式の限界が考えられました。この研究テーマに取り組んだ背景と過程について，説明したいと思います。私の出身地は四大公害病で有名な三重県四日市市であり，コンビナートによって汚染された海を見て育ち，水環境問題に取り組みたいという意志を持ちました。この理由から立命館大学の環境システム工学科を選択し，学部時代から水環境の野外調査に精力的に取り組んできました。研究を進める上では，苦しいことは少なくありませんでした。想定外の大規模降雨によって自動採水機と濁度計が流されたり，台風時に蛭が大量に出現する山林にて三日間徹夜で籠ることがありました。思うような成果が得られず，研究から逃げたいと感じる時も多々ありました。しかし，自分がこのテーマと向き合っている理由を思い出すことと，先生方と仲間の研究に対する熱意に目を向けることで壁を乗り越えていくことができました。その結果としてある程度の研究成果を出し，学生生活の最後に学識者の方々から評価していただいたことは感激しました。研究活動を進めていく上で，水環境で起こっている現象を数字で説明していく面白さに魅了され，私は就職先でも水環境問題に従事することを決心しました。今年の4月からは，コンサルティング会社にて河川関係の仕事に携わっています。仕事に取り組んでいく上で不安なことは多くありますが，研究に一生懸命取り組みクリタ賞を得たという経験が，自信となって不安を取り除いてくれます。私はまずは河川の技術者となり，将来的には河川，上下水道施設および産官学民の連携がとれた統合的な流域管理を実現したいという夢を抱いています。水環境問題を根本的に解決していくためには，治水および利水面でバランスがとれておりかつ様々なステークホルダーの参画が肝要であると考えています。この夢を現実のものとするには，考えられないような多くの困難が待ち受けていますが，今回の経験を励みにして立ち向かっていきます。最後に，繰り返しになりますが，文頭で述べた方々にもう一度お礼を言いたいと思います。ありがとうございました。